

「1000時間体験学修」プログラムについて
－教員に不可欠の「教育的実践力」の基礎を育む－

国立大学法人島根大学

教育学部附属教育支援センター

准教授 山本幸市

准教授 福間敏之

1000時間体験学修の導入と 島根大学教育学部の教員養成改革

平成16年 島根／鳥取両大学の教育系学部再編に際し、島根大学教育学部は、教員養成に特化した学部づくりをめざした。その際考えたことは、次の2点

1. 21世紀にふさわしい教員養成プログラムはどうあるべきか？
2. 教員養成学部の教育組織とシステムはどうあるべきか？

「1000時間体験学修」のプログラム構想と「教育支援センター」の立ち上げはその検討の成果であり、教員養成政策を担う文部科学省、都道府県教育委員会さらには全国の教員養成系大学・学部が注目。

・学校教育法第31条(旧学校教育法18条の2)

「…教育指導を行うに当たり、児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする。」とされ、学校教育における体験活動の充実に法令化し、努力義務としている。

・学校教育への体系化された取り組みは緒についたばかりである。また、教員の専門性を育む大学の教職課程においても、体験活動の理論と指導力を併せ持つ教員養成の養成について、その方法が確立されていたわけではなかった。

島根大学ではすでに平成6年当時から

社会教育主事資格科目として、
社会教育施設における「社会教育実習」や社会教育施設ボランティアを実施。

- ・国立三瓶青少年交流の家

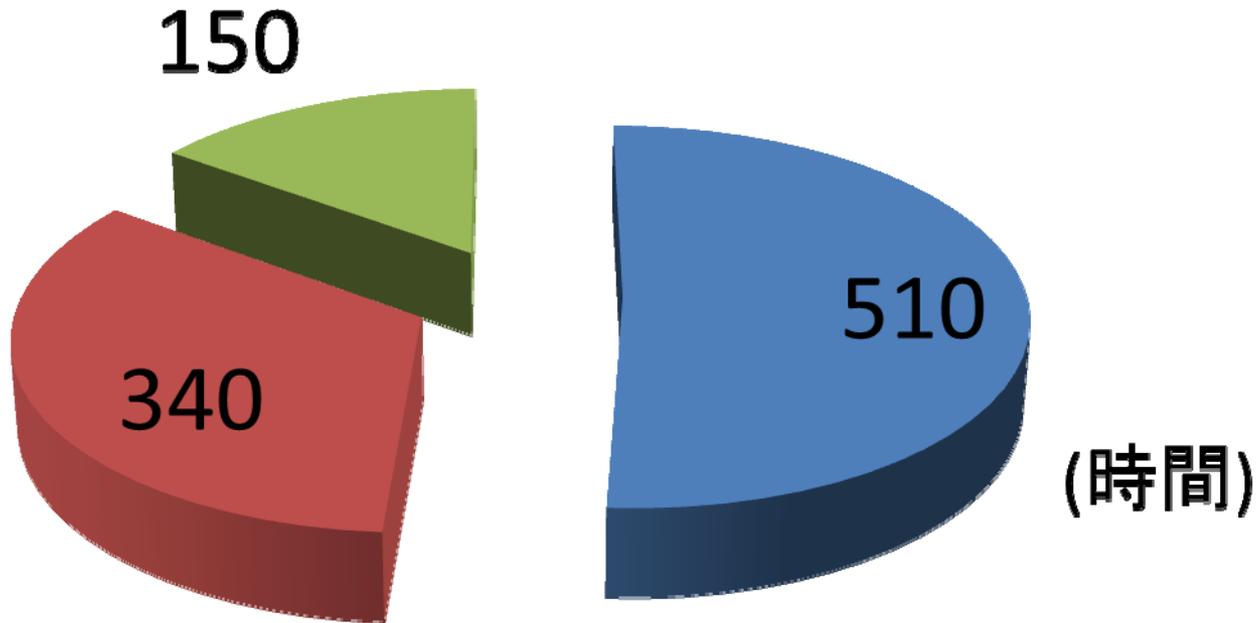
10泊11日の研修で、「朝の集い」や「夕べの集い」などの指導，研修の補助指導者，研修団体のプログラム調整等，職員の業務を体験。

- ・国立三瓶及び島根県立青少年の家で、宿泊型ボランティア活動体験プログラム研修。



平成16年4月から、教員養成学部としての理論的学習に加え、「多様な体験活動を通じてこそ、高度な教育実践力を培える」との観点から「1000時間体験学修」プログラムを必修として導入。

1000時間体験学修



■ 基礎体験領域

■ 学校体験領域

■ 臨床カウンセリング体験領域

(時間)

リーフレット参照

基礎体験領域(510時間)

《必修》(110時間)

- ・基礎体験セミナー
- ・入門期セミナー I・II
- ・介護等体験

《選択》(400時間)

- ・学校体験
- ・行政連携事業(放課後・休日の活動)
- ・社会教育施設での体験
- ・各種団体での体験
- ・専攻別体験
- ・実習セメスター
- ・大学主催の体験プログラム
- ・その他の教師力向上のための体験

基礎体験領域(選択)

これからの教師に特に求められる

社会性 や 豊かな人間性 を育成する場

体験してこそ分かることがある。体験でしか学べないことがある！



400時間分を、活動を選択し4年間で積み上げていく

「10の教師力」...身につけてほしい資質や能力



基礎体験領域の運営

(学 生)

- ☆ 活動選択及び登録
- ☆ 活動前の目標設定(事前指導)
- ☆ 体験先での活動
- ☆ 活動後の自己評価(事後指導)

活動情報の提供
事前・事後指導

活動報告

活動指導

活動・支援

- ☆ 活動登録の受付・集約
- ☆ 活動記録・積算時間数の保存
- ☆ 基礎セミナーの実施

活動募集

連絡調整

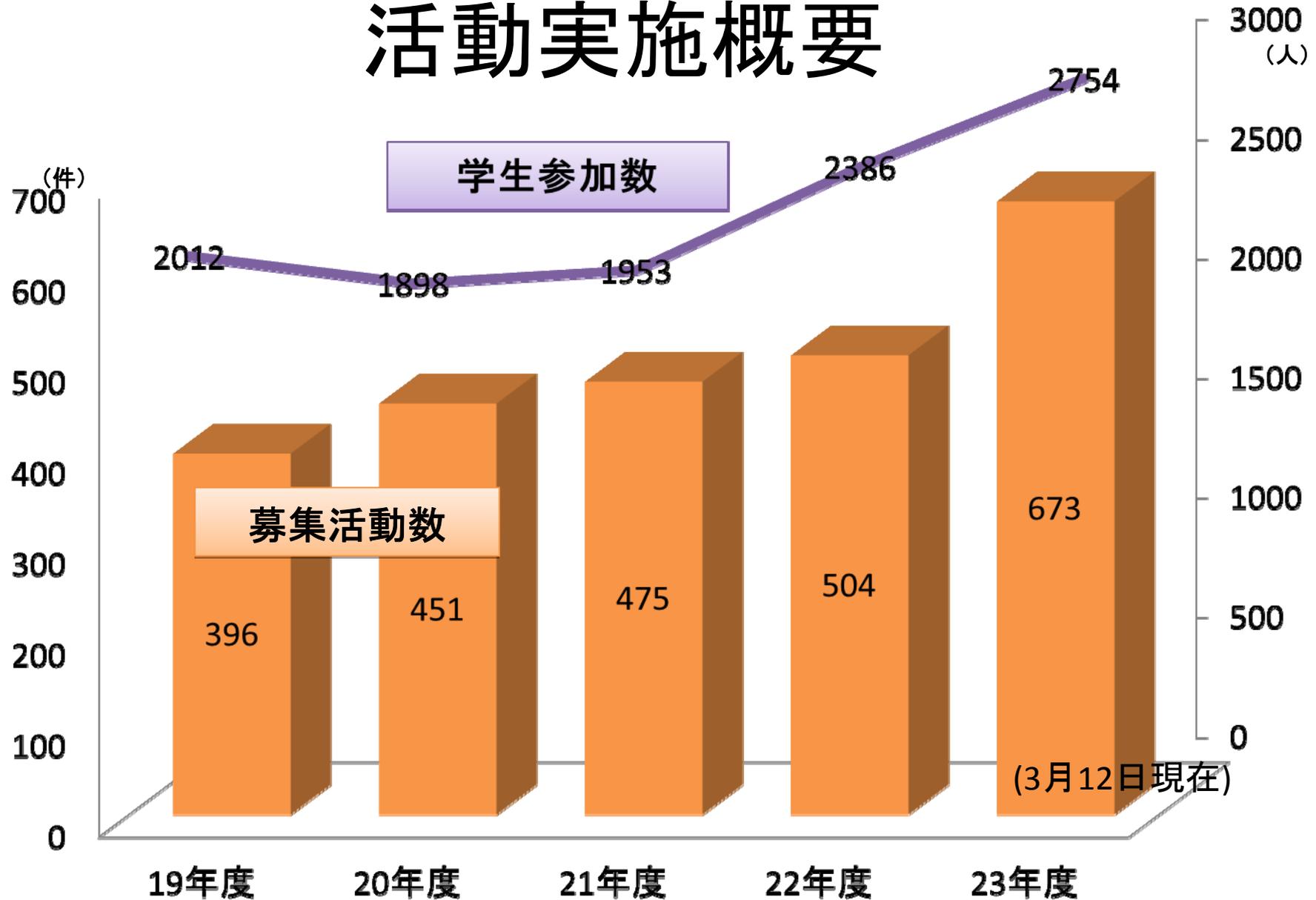
参加学生通知

- ☆ 事業企画・運営
- ☆ 学生の受け入れ
- ☆ 活動評価

(附属教育支援センター)

(受け入れ事業所)

活動実施概要

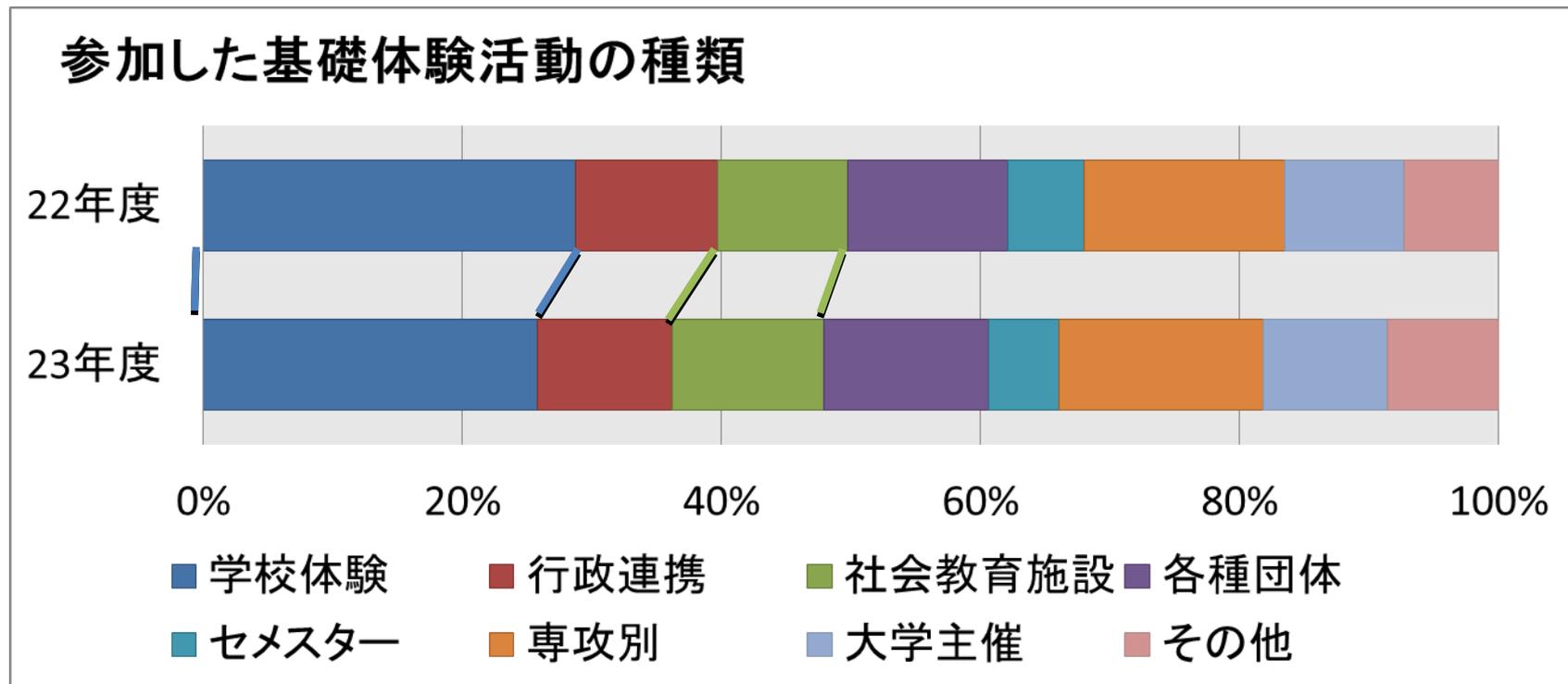


学生の取組状況

基礎体験活動時間の推移

	16年度生	17年度生	18年度生	19年度生	20年度生
基礎体験活動時間(平均)	552	614	673	682	701
基礎体験活動時間(標準)	410	410	410	450	400

(時間)

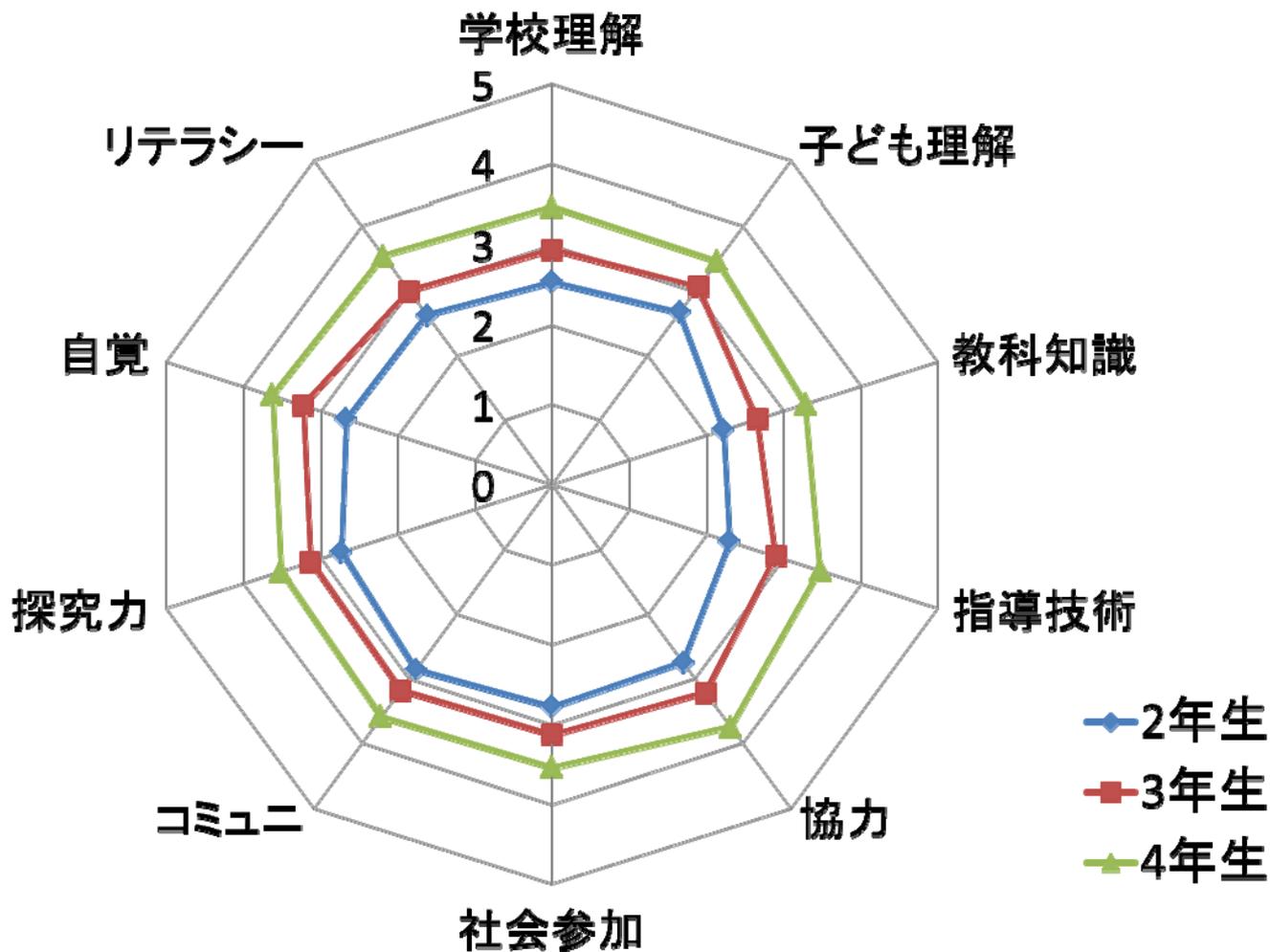


学生の学びの振り返り

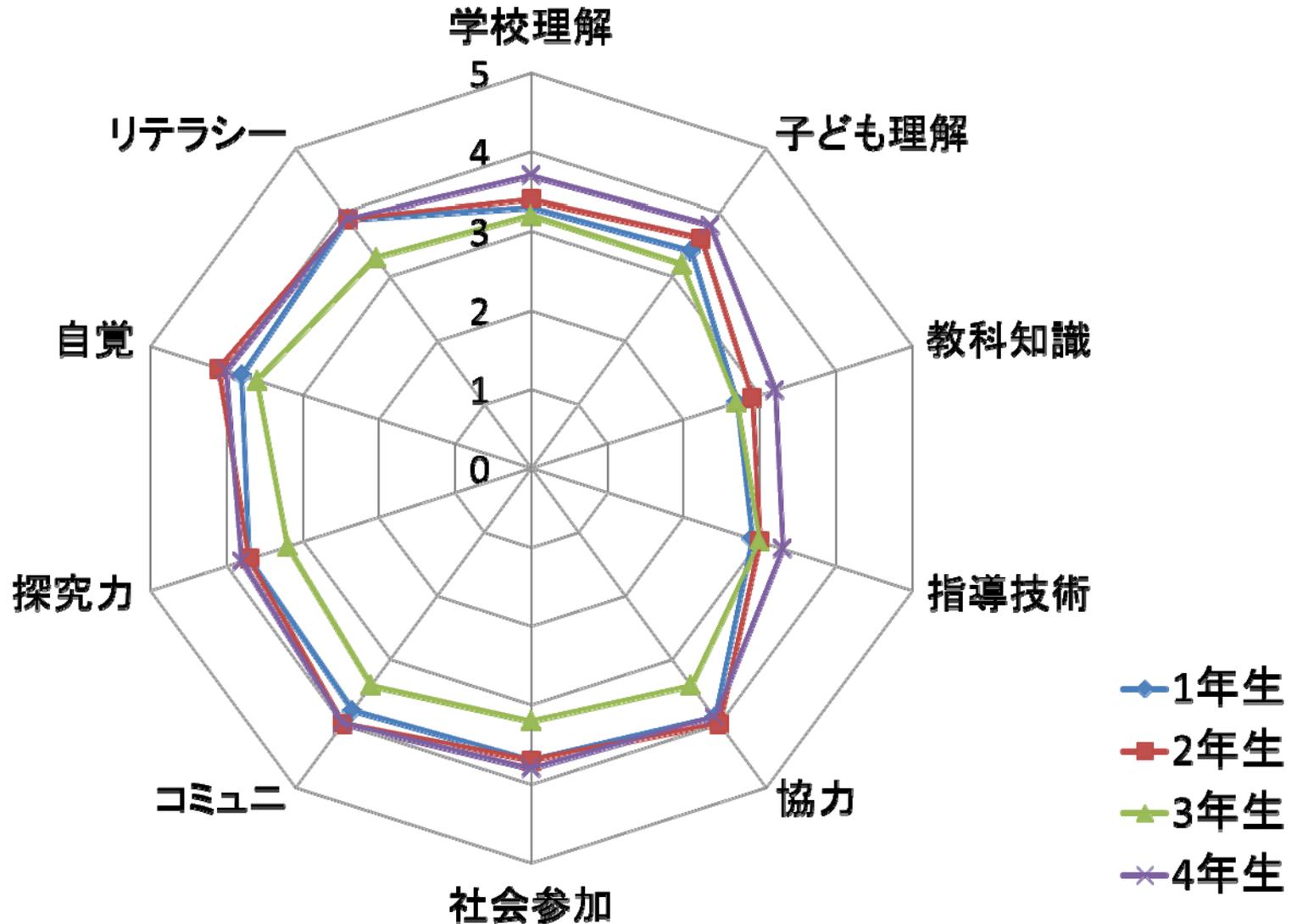
- ・各活動後に事後指導を受け、振り返りを行う。(資料)
その際に、自己評価を行い、マークカードによる入力を行う。
- ・各学年で、基礎体験セミナーを実施し、振り返りを行う。
1, 2年生・・・年2回 3, 4年生・・・年1回
- ・プロフィールシート入力により、教職教養、専攻、基礎体験活動等による身についた教師力を分析する。その後、専攻の担当教員によるアドバイスをを行う。

教師力達成の自己評価

(プロフィールシート入力による経年変化 20年度生)



教師力達成の自己評価 (基礎体験セミナー時のアンケート 2011実施)



学生の学びについて(学生アンケートより)

	21年度	22年度	23年度
取組状況自己評価	2.9	3.2	3.1
有意義観自己評価	4.1	3.9	4.0

※5段階評価

教師力の項目ごとでは、「子ども理解」「協力」「コミュニケーション」が相対的に高い。

感想

- ・教育現場から離れ、地域事業に携わることで、様々な方と交流ができ、教育現場ではない社会における視野が広がった。
(社会教育施設)
- ・長い準備期間をかけて事業に取り組むことのおもしろさと、子どもたちが本気になる過程、成長していく姿を見ることができ、これからの参考になった。
(社会教育・企画)

- ・保健室に実際に入り、子どもたちと接する中で、関わり方についてじっくり考えることができ、保健室に求められる役割を感じることができた。
(学校)
- ・子ども達と4泊5日という長丁場で接することで、深い子ども理解ができた。また、将来先生になるときに大切なことを多く学ぶことができた。
(社会教育・宿泊体験)
- ・研修の中で、コミュニケーション力や積極的に行動する姿勢など、子どもたちに教えるべきことについて再認識できた。
(研修への参加)

教育現場で働く卒業生より

・教育現場に出てみて一番感じることは、人とかかわる力「コミュニケーション能力」がとても大切だということです。年齢も立場も様々な人とかわる毎日・・・その中でより良い関係を築いていくことが、すべて子どもに良い形となって帰ってくると実感しています。この1000時間体験学修で様々な経験をし、色々な方とかわることができたことは、今の私にとって大きな力になっていると改めて感じています。
(幼稚園教諭)

・教育現場やそれ以外の様々な現場で自分自身が色々な体験をするということは、それが上手くいってもいなくても大変大きな糧となります。いろいろな現場に行き、たくさんの人と出会い、物事の考え方や捉え方、視野が広がりました。机上の勉強だけでは学ぶことのできない、本当に社会に出て必要な経験を学生のうちから出来るということは、貴重な機会であると思います。
(中学校教諭)

「教育学部同窓会誌62」より

1000時間体験学修を行う際の課題

○体験先の確保について

→プログラムを開始した頃の専任教員が、地域や学校へ積極的に広報し、現在は多くの募集をいただいている。
学校については小・中が中心である。
社会教育施設における活動の募集が多い。



毎年体験先を確保する際に生じる「ミスマッチ」の懸念はある。
学生の学びたい場所と受け入れ希望者の意図の間に生じるズレなのだが、実際には実際に活動に参加した学生の活動の様子を「基礎体験セミナー」で事例発表してもらい、次の世代の学びに生かしている。

○時として、学生を「ひと手間」として考えたり、アルバイトとして扱う事業主体がある。



募集用紙をもとに内容を吟味し、事業主に確認を取っている。

○学生が活動を選ぶ基準が、

①内容、②自分のスケジュール、③交通手段を重視している。

山陰地方は、東西に長く、遠方で興味ある活動があっても交通手段がなく参加できないという学生も。

○夏季休業中に、体験活動を募集する団体が多いが、大学の夏季休業日とズレがあるため、募集に対して学生が集まらないこともある。

学生の参加を当てにしている団体からは、若干不満の声も。

→年度初めと終わりに、大学と事業者間をつなぐ「連絡調整会議」を開催し、行事日程の連絡や活動の振り返りを行う機会を設けている。

○募集時と実施時の活動内容の相違

→事後指導後に、体験先に連絡。次回の募集に活かす。

○活動する様子の視察

→大学近隣の活動は、センター教員が訪問するようにしている。

遠方や、休日は、あまり訪問は出来ていない。

○活動する学生の問題として、連絡が取れなかったり、マナーが守れなかったり、意欲的に活動しなかったりと、迷惑をかける場合がある。

→基礎体験セミナーや活動ごとの事前、事後指導で指導をしている。

国立三瓶青少年交流の家との 連携状況について

1000時間体験学修を導入した平成16年度

- 国の青少年健全育成重点施策が掲げられる
「次世代を担う青年リーダーの育成」
「学校における体験活動の重視」

両者の思惑が一致，連携強化

交流の家企画事業への参画，研修支援事業における子どもたちへの支援と，国立大学の学術的・理論的研究機能を融合させ，教員養成課程における体験学習のあり方について，共同研究を行う。(18～19年度)

参加学生数の推移

	参加活動数	参加学生数
平成20年度	15	174人
21年度	15	131人
22年度	23	195人
23年度	31	263人

最も特徴的な主催(企画)事業

さんべ夢ステージ

<趣旨>

主体的に社会に参画しようとする青少年を対象に、事業の企画・運営を通してリーダーシップを身につけ、将来のリーダーとなるための体験を通じた学びを提供する事業

<ねらい>

「リーダーシップ」と「チームワーク」をキーワードに、企画・運営の様々な場面で合意形成、問題解決を繰り返す中で対人関係能力などリーダーとして必要な資質の向上を図る

学生の活動スケジュール(平成22年度の場合)

「順を追って想いを高めていく」

- ①企画力・運営力アップセミナー編～18名参加
7月2～4日(2泊3日)
- ②想いを形にする編～39名参加(延べ)
8月21～22日, 9月14～15日(1泊2日)
10月15～17日(2泊3日)
- ③夢が現実になる本番編～32名参加
10月22～24日(2泊3日)

→ 仲間との「合宿」を通して絆を深めていく

学生の学修成果

企画をふくらませていく段階で

- ・ 思いつきや知識を企画へと転換する話し合いの中で、コミュニケーション能力・合意形成能力・問題解決能力を必要とする場面を数多く体験することができた。
- ・ 交流の家職員が必要な時のみ助言を与えるサポート役に徹することで、企画づくりや組織づくりにおいて参加者の主体性が引き出せた。
- ・ 大学1～2年生にとっては、十分な話し合い活動の中で、他人の意見を聞きながら多角的にものごとを見る力を養う場となった。
- ・ 意見を言いやすい少人数でのグループワークの形態をつくることにより、1～2年生がリーダーを務め、3～4年生がそれをサポートする形が自然とできあがった。

「さんべの学び」のよさ

・他大学生との交流が深まる

→ 自分たちだけの考えにとらわれなくなり、より広い視野で物事を考えるようになる

・異学年が縦でつながる組織の強さや良さが活動を通して実感できる

→ 人間関係力が、より強固なものになる

卒業生の声（現 小学校教諭）

4年間の活動で、特に「企画・運営力」「指導力」を伸ばせた。夢ステージをはじめとした学生企画の中で、私たちが伝えたいこと、来場者に感じてほしいことなどの「想い」をカタチにしていくことは容易ではなかった。

仲間とぶつかり合い、何度も試行錯誤を繰り返しながら、納得のいくものを一から創り上げていくからこそ、やり遂げた後の喜びは一際大きかった。
（中略）熱いハートと冷静な頭脳を持ち合わせることの大切さも学べた。

卒業生の声

(現 江田島青少年交流の家勤務)

【三瓶でのボランティアを通じて、社会教育施設で役立ったこと】

1 ボランティア育成の際、ボランティアの気持ちになって接することができる。

→ボランティアが次も事業に参加したいと思ってくれるよう、接している。

2 子どもの年齢、特性によって接し方を考えることができる。

→特に意識しなくても、人によって適した接し方ができている。

3 裏方に徹することができる。

→参加者の笑顔、成果のためには、裏方(備品準備、安全管理等)が大切 ということボランティアを通じて学んだ。実際、仕事として行うとき、考える視点は広がったが、この裏方の大切さという土台はボランティアで培われたものが今も生きている。

国立青少年教育施設に求める機能や役割について ～本学部の「10の教師力」から～

《コミュニケーション》

活動を通して仲間と出会い，絆を深めることにより，人と関わることの良さを実感する

《探究力》

企画力の伸長を核とした「授業力の向上」へ

国立青少年教育施設に求める機能や役割について ～本学部の「10の教師力」から～

《社会参加》

内発的動機にもとづく活動に取り組むことへの
きっかけづくり→自発的な人間づくり

地域社会に貢献しようとする意欲の向上

国立青少年教育施設に求める機能や役割について ～本学部の「10の教師力」から～

《リーダーシップ・協力》

学級づくりの基礎となるファシリテート力や
仲間とともに取り組む際のメンバーシップ向上

時と場に応じたリーダーシップの発揮できる
社会人の育成

今後の課題

- 参加学生絶対数の確保と意欲のバランス
- 学生自身のスケジュール管理
- 教員志望が前提の中で、社会教育主事等への道も模索